Ⅱ－９　［コラム］湯舟坂２号墳出土貝装馬具、もう一つの海の道

諫早 直人

黄金の大刀と比べると、湯舟坂２号墳の馬具は地味だ。金銅装の装飾馬具もなくはないが、鏡板轡や杏葉は出土していない。鞍金具から４つの鞍が副葬されていたようだが、木製の鞍本体は朽ち果て、その姿を想像することすら難しい。もちろん見た目とは裏腹に、花谷浩氏（出雲弥生の森博物館館長）が若き日に実測、報告し、価値づけたこれらの馬具は、基準資料として様々な論文に登場し、学史的にも重要な資料となっている（花谷 1983）。それらの中でもと

写真１　湯舟坂２号墳出土貝装馬具（栗山雅夫氏撮影）

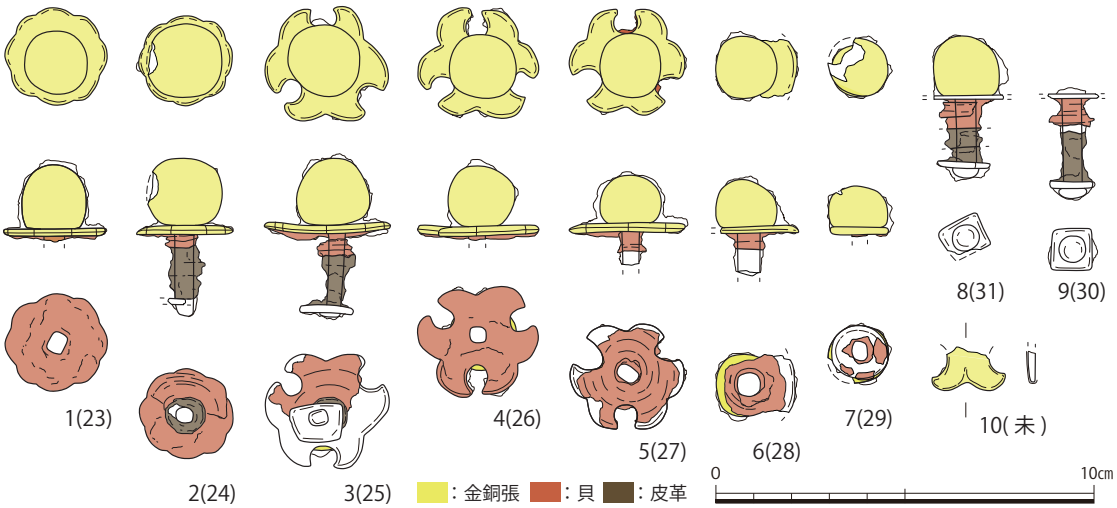

図１　湯舟坂２号墳出土貝装馬具（S=1/2。括弧内の数字は報告書第 30 図の枝番号）

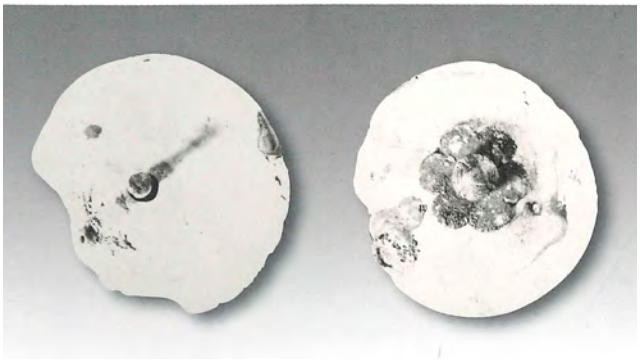

写真２　遼寧省馮素弗墓出土貝装馬具（遼寧省博物館 2015）

りわけ目をひくのが、ここに紹介する貝装馬具だ（写真１）。その重要性は、①数少ない近畿地方出土例であること（貝装馬具の分布は九州や東日本に偏っている）、②極めて稀な日本海沿岸出土例であること（本例と福井県永平寺町春日山古墳出土辻金具くらいしかない）、③湯舟坂２号墳出土例の報告をきっかけに貝装馬具研究が本格的に始まったこと、の３点に要約される。

報告時は「おそらくイモガイであろう」という推測に留まっていたそれらの貝種について、黒住耐二氏により南海産大型イモガイと確かめられたことは、本プロジェクトの地味ながらも大きな成果の一つである。筆者もまた、貝の同心円状構造が確認できる座金具裏面を加えた実測図の作成をおこなった（図１）。栗山雅夫氏のデジタル高精細写真とともに、40 年ぶりに研究基盤を更新した点は、黄金の大刀と同じであり、後日、改めて詳細な検討の場をもちたい。

貝装馬具研究において、とりわけ議論となってきたのがその製作地だ。本例のような貝装飾金具は、６世紀後葉～７世紀前葉の日本列島から出土しており、畿内中枢での製作、ないし畿内中枢からの工人派遣による北部九州での製作などが想定されてきたが、工房址は発掘されておらず、どちらも決め手に欠く。いまここで共有できる確かな事実は次の２点。貝の産地が琉球列島であること、そしてそれを加工した馬具が最終的に丹後半島の湯舟坂２号墳に副葬されたこと。いずれにせよ海を東西にまたいだ、ダイナミックな生産・流通を考える必要がある。

貝装馬具を考える上で、重要なことがもう一つ。日本列島に先行して大陸でよく似た貝装馬具が使われていたことだ。その西端は中国東北部の慕容鮮卑。北燕という国の王弟・馮素弗（415 年没）の墓から出土した貝装馬具は、金具だけみると湯舟坂２号墳出土例（図 1-1・2）と似ている（写真２）。似たような花形座金具をもつ貝装馬具は、朝鮮半島南部の金官加耶の４世紀前半の王墓（金海大成洞 91 号墳）からも出土しており、こちらは琉球列島産のゴホウラを用いている（この古墳からはイモガイ装馬具も出土している）（木下 2017）。きわめつけは新羅。その中枢であった慶州の５世紀後半から６世紀前半の王陵級積石木槨墳からは、膨大な数のイモガイ装馬具が出土しており、古墳時代後期の日本列島で盛行するイモガイ装馬具の直接的な系譜は、ここに求められる。詰まるところ貝装馬具を日本に伝えた南北の海の道は、それ以前から琉球列島産貝を大陸に運んだ道でもあった。小さな金具の裏面に、かすかに遺された同心円から広がる海は、ただただ広い。

参考文献

木下尚子 2017「金海大成洞 91 号墳出土のゴホウラ・イモガイ製品―貝装馬具とその位置付け―」『金海 大成洞古墳群―追加報告 및 総合考察―』大成洞古墳博物館

花谷浩 1983「（２）馬具」『湯舟坂２号墳』久美浜町教育委員会

遼寧省博物館 2015『北燕馮素弗墓』文物出版社

編集後記

2020 年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも 6 年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが 2018 年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3 回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわかないが、1994 年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。（い）

表紙写真

上左　双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）

上中　第 2 回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）

上右　「つなプロ」風景（諫早直人撮影）

下　湯舟坂 2 号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）

裏表紙写真　湯舟坂 2 号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）

京都府立大学文化遺産叢書　第 33 集

地域資源としての湯舟坂 2 号墳

編　集　諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
〒 606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
https://kpu-his.jp/
発 行 日　2025 年 3 月 6 日
印　　刷　北斗プリント
〒 606-8540　京都市左京区下鴨高木町 38-2